

発 達 部 門 (青年・成人)

青年期以降の発達に関する研究の現状と課題

勝 俣 暎 史

(熊本大学)

はじめに

「教育心理学年報」も1990年度で第30集を数えているが、1985年度(第25集)から現在のスタイルをとるようになり、「青年期以降の発達」に関する研究が独立して設けられている。今年度は6年目に当たるが、従来の担当者が最も苦慮してきたことの1つは、どのような研究を「青年期以降の発達」研究として位置づけるかという点であったように思われる。結局は、それぞれの年度の担当者が苦心の結果、独自の視点から領域分類を行っており、統一された見解は得られていない。そこで筆者は、青年期以降の発達を捉える基本的な視点として、5つの「能力の発達」(認知的能力、身体的能力、社会的能力、自己評価能力および経済的・職業的能力の発達)を設定することとした。そして、従来の担当者がとりあげてきた領域分類のキーワードを5つの「能力の発達」領域に配分することによって、従来の担当者の試みた分類も生かされるように配慮した。その結果、①青年期以降の発達研究における研究方法、②発達研究における基礎的な研究課題(5つの能力の発達)、および③青年期以降の発達のなかで直面する発達危機の問題および適応などに区分して検討することとした。

なお、本稿では、日本教育心理学会第32回総会発表論文集および1989年7月から1990年6月までに刊行された教育心理学研究(第37巻3号～第38巻2号)と心理学研究(第60巻3号～第61巻2号)に掲載された青年期以降の発達に関する研究について概観する。

学会発表及び学会誌における青年期以降の発達研究

青年期以降の発達研究に関する学会発表は、日本教育心理学会第32回総会では545件中62件(全体の11.8%)、日本心理学会第54回大会では743件中61件(全体の8.2%)であった。それらのうち、最も多くなされているのは青年期に関する研究であり、成人期および老年期に関するものは例年同様に少なかった。青年期を対象とした研究は日本心理学会よりも日本教育心理学会の方が多く、老年期の研究は日本心理学会の方が多いため、これまでの傾向と同様であった。シンポジウムに関しては、日本教育心理学会総会における「中年の発達心理学」、「青年に

とって学校とは」および「青年心理学はどうあるべきか」の3件が青年期以降の発達に関するものであり、日本心理学会では認められなかった。また、教育心理学研究(教心研)では掲載論文総数53編中6編が、心理学研究(心研)掲載論文総数53編中6編が青年期以降の発達をとりあげた論文であり、全体に占める比率は1割程度であった。

内容領域別の研究の動向

1. 発達研究における研究方法

青年期以降の発達に関する接近方法は、横断的研究法、縦断的研究法および追想的研究法などの広義的研究法(method of study)と、質問紙調査法、観察法、実験法、面接法、事例研究法、心理検査法および自己記述法(作文、日記、手記、自叙伝法)などの資料収集技術(techniques)に大別することができる。本年度の学会発表および論文では、縦断的研究法によるものや、面接法、事例研究法によるものなども少数ながらみられたが、ほとんどが横断的研究であり、しかも質問紙調査法を用いた研究であった。発達研究をより充実した中身の濃いものとして行くためには、それぞれの研究方法や資料収集の技術の長所を生かしたより多様な視点と接近方法が用いられてしかるべきではないと思われる。

なお、発達研究の技術の開発を意図した研究として、大川一郎・中村淳子・渡部玲二郎・山際勇一郎・杉原一昭・加賀英夫(教心、発達325, 326)の高齢者をも対象とした知能検査作成に関する研究および小原政秀・荒木紀幸(教心、測定・評価925, 926)の高校生用ストレス検査の開発に関する研究があった。

2. 発達研究の基礎的な研究課題

1) 認知的能力の発達を中心とした研究

認知とはなにかについては種々な見解があるが、ここでは、知覚、言語、知能、思考、注意力、対象認知、計画などを指すこととする。この領域に関する研究としては、バウム・テストにみられる生涯発達傾向および老年期の言語機能に関するものがあった。

知覚ないし対象認知に関係する研究として、一谷 彊・小林敏子・津田浩一・相田貞夫・松井孝史の報告(教

心、人格565)がある。この研究は、生涯教育の効果測定に関する研究の一環としてバウムテストを用いて幼児から高齢者(1,438名)の描出傾向の分析を行ったものである。その結果、幹の中心部の位置は、幼児期から小・中・高・大学と加齢とともに右方向へ移行するが、画面中央線の位置より右側に幹中央の位置が移行することはないことなどを見出しているが、このような基礎的な研究が蓄積されるならば、発達のにも臨床的にも有益な示唆が得られるであろう。

老年期の言語機能に焦点を当てたものとして、土田宣明・守屋慶子の報告(教心、発達323, 324)がある。養護老人ホームに在園する66歳から84歳までの老人17名を対象にして、ブロックの分類過程における言語による行為の調節機能について検討した結果、①言語化された基準が外的な要因によって妨害されやすいこと、および②分類基準を言語的に結合させ、新たな基準で分類することが困難であることなどを明らかにしている。また、事象の構造的把握について検討した結果では、複数の事象に、継起する一連の事象としての構造を与えることは、老年期においても難しいことなどが指摘されている。

幼児期や児童期の発達研究においては、認知的能力に関する研究は数多く認められるが、青年期以降においては少なかった。青年期や中年期の人々を対象とした研究を含めて、生涯発達の観点に立った研究がなされることを今後の課題として期待したい。

2) 身体的能力の発達を中心とした研究

この領域の研究としては、青年期のみならず中年期および老年期における形態、生理、各種機能の発達や変化およびそれらに対する認知ないしイメージなどが課題とされることが期待される。本年度報告されたものとしては、7編中青年期における身体像(body image)に関わる研究が5編で最も多く、その他に性の受容の発達および避妊の問題がみられた。身体像に関係した報告のうち、思春期の身体発達と心理的適応について焦点を当てたものとして斉藤誠一の報告(教心、発達366)がある。この研究は、公立小中学生810名(男子398名、女子412名)を対象としたものであり、男子では、顔の構成部位などの身体部位に対する満足度が思春期に入ることにより低くなり、self-esteemも思春期中期群において最も低かった。女子では、思春期後期群において身体満足度もself-imageも有意に低かった。柴田利男・野辺地政之(教心、発達367)も大学生224名(男子101名、女子123名)を対象にして身体部位・外観に関する男らしさ・女らしさの評定を求めている。その結果によると、身体の男らしさ・女らしさの認知には、sexとgenderの両面が反映されていることを指摘している。また、柴田利男(心研、

61巻2号)は、身体像を社会的自己の最も具体的な部分であると位置づけた上で、青年期における身体像の評価的側面である身体満足度(身体の部分や外観に関する24項目について)が対人関係(自己開示)に及ぼす影響を検討している。その結果、身体満足度の高い群(H群)は初対面の異性(初対面の面接者)に対して恥ずかしさ(消極的反応)を示しただけであったが、身体満足度の低い群(L群)は相手の性別に関わらず緊張や堅さを示すとともに、異性に対しては緊張や堅さと同時に発言時間が長い(積極的反応)などの矛盾した行動パターンが認められ、同性に対しては異性に対するよりも不安や恥ずかしさを感じていることが認められた。この研究は72人の大学生に対して実験者と2人の面接者が実験と面接を実施したものであり、両場面のVTRも収録され、行動の評価がなされているなど、研究方法においても興味あるものである。

身体像そのものの研究ではないが、青年期の食行動に関する研究が2編報告されている。高木秀明・島田さとの「大学生女子における食行動傾向と性役割受容」(教心、人格526)および葉賀 弘・大島吉晴・西野証治の「摂食態度と自己概念、身体概念との関係についての研究」(教心、人格528)は、近年増加していると言われる神経性食思不振と身体像との関係を明らかにしようという意図からなされているが、臨床的研究と併せて、このような研究がなされることの意義は大きいと思われる。

その他、久国淑子・白井利明(教心、363)は、思春期から青年期における性の受容の意味づけの発達の变化を明らかにしようとした。その結果、男女とも中学生の段階では自己の性に対する受容が低いが、高校生の段階になると受容が肯定的な方向へと変化することなどを認めている。また、性意識をとりあげたものとして、松谷徳八の「避妊群と非避妊群による女子大学生の性意識と態度の差異に関する研究」(教心、365)があるが、年齢差や性体験の有無などの条件を統制した上での分析も必要であるように思われる。

身体的能力の発達や衰退に伴う心理的效果は、青年期以降の人々の社会的適応においても重要な課題である。したがって、この領域の研究も、今後さらに充実させることが要請されるであろう。

3) 社会的能力の発達を中心とした研究

社会的能力の発達に関わる研究としては、親子関係、きょうだい関係、家族関係、教師との関係、向社会的行動、ソーシャル・サポートなどの研究が期待される。日本教育心理学会総会発表論文集の中には9編、教育心理学研究には2編の該当論文があった。

親子関係と児童・生徒のおとな像の発達などに焦点を

当てたものとして、塚野州一の報告(教心, 発達316)がある。小・中学生275名を対象としたこの調査結果によると、小学4年生では肯定的なおとな像が多いのに対して、中学2年生では否定的なおとな像が多いことを明らかにし、肯定的なおとな像と否定的なおとな像を規定する要因は、親への信頼感と接触度が重要であることが指摘されている。武内信子は「女子大生のきょうだい関係に関する研究」(教心, 317)において、青年期女子の2人きょうだいの関係をきょうだい構成や家族環境、現在の同居・別居の別、性別特性などの関連から分析している。また、酒井亮爾・石黒彰二・許心華は「家族関係の心理学的研究(1)―祖父母に対する青年の意識―」(教心, 発達319)において、愛知県内の中学生と大学生男女294名を対象とした調査の結果、祖父母との交流という点では、同居している場合の方が別居している場合よりも、また中学生の方が大学生よりも多いこと、祖父よりも祖母の方が中学生・大学生ともに多くなっていることなどのほか、祖父よりも祖母に対する方がより好意的なイメージをもっていることなどを明らかにしている。

親からの自立―依存の葛藤で揺れている青年期における家族内での自分の位置づけを明らかにしようとしたものとして、竹内和子・上原明子の報告(教心, 人格501, 502)がある。この研究では、女子青年(短大生)によって描かれた「円による家族画」を描画順、大きさ順、相対的配置および円の相互のかかわりの点から検討した結果、両親に包まれていた「私」が自立への道を歩み始め、母親との対等性を得つつあるとはいえるものの、父親との対等性は認められないという青年期女子の家族の中での位置づけがさまざまな位相で描きだされているとしているが、今後のより綿密な研究を期待したい。

澤田瑞也(教心, 人格508)は、中学生のパーソナル・コンストラクトの内容や文化度、人物間の文化度の発達的变化の追跡的研究を行い、自分と親との類似視が発達に伴って低下することなどを明らかにしている。

枋尾順子(教心, 人格555)は、女子青年の社会的態度と自我の発達に関してLoevingerの自我発達理論に基づいて検討している。この研究では、社会的態度尺度および文章完成法による自我発達測定尺度が実施されているが、保守的態度、大衆的態度は自我の発達が高くなるほど低く得点されている。このことは青年期にある女性が伝統的でステレオタイプな社会的態度をそのまま受容したり、単に周囲へ同調し、他人指向的な態度に甘んじることにに対して抵抗を感じはじめていることを示唆するものであるとしている。

高橋裕行(教心研, 38巻3号)は、親密性地位と同一性地位との関連における性差および親密性の地位の性差

を検討するために、親密性の危機に直面している可能性が高いと考えられる大学3, 4年生64名(男女各32名)を対象にして親密性地位面接(修正された評定方法を採用)および同一性地位面接を実施した。その結果、親密性地位については性差が認められ、男子では低親密性の者が多いが女子では稀有であり、女子は前親密と親和地位の者が男子の2倍となっていた。また、親密性地位と同一性地位との関連については、男女ともいずれの領域においても、全体的な同一性地位においても有意な関連が認められている。高橋はこの結果を、Eriksonの同一性危機と親密性危機に関する性差についての仮説に疑義をはさみ、女子も男子と同様のプロセスに従うとの新たなパースペクティブを提唱するものであると解釈している。

上野徳美(教心研, 38巻3号)は、教師の説得的な働きかけが児童・生徒の態度や意見に及ぼす影響を、説得に対する抵抗の側面を中心にして発達社会心理学的な観点から検討している。その結果、態度や行動の自由を強く脅かすような説得の働きかけを受けても、児童期中期の段階ではそれを自由への脅威として認識する傾向が少なく、説得に対する拒否的な反応は生じにくい。児童期後期から青年期前期の段階になると、自由への脅威として明確に認識され、リアクタンスの喚起などによって説得への抵抗・反発の生じることを明らかにしている。児童や生徒に対する親や教師の対応のあり方に対する有益な示唆を含んでいるといえる。

また、河合千恵子・下仲順子(教心, 発達322)は、老人のソーシャル・サポートの構造と機能が、老人のQOL(Quality of life)にどのような影響を及ぼしているかについて、東京都内の在宅老人の福祉施設の利用者(平均年齢74歳)に個別面接を実施した結果について検討している。サポートネットワークの大きさは男性より女性の方が有意に大きく、年齢別では80代が最も小さかった。また、60代では受領より提供の方が、70代、80代では提供より受領の方が有意に多かった。ソーシャル・サポートは老人のQOLを高める効果を持つことが示唆され、とくにサポートの提供がQOLをたかめることに貢献していたことを指摘している。今後の生涯教育ないし生涯学習のあり方に関しても重要な示唆が含まれているように思われる。

社会的能力の発達領域の研究は、内容的には重要かつ興味深い、種々な問題を含んでいるが、1編を除くすべての研究は青年期を対象としたものであった。中年期および老年期にとっても重要な課題であろう。

4) 自己評価能力の発達を中心とした研究

この領域の研究としては、自己評価、自己(自我)意識、自己概念、自我同一性、孤独感、劣等感、絶望感、

無力感などが含まれる。この年度においては、この領域に属する研究は、日本教育心理学会総会での報告が8編、教育心理学研究および心理学研究に掲載された論文が7編あった。対象は児童期から老年期までにわたっており多様であるが、青年期を対象とした研究が最も多く、中年期以降では女性を対象としたものが多かった。

自己評価に関するものとして、岡田 努・永井 徹(心研, 60巻6号)は、質問紙上に現われた青年期における自己評価と対人恐怖的心性の関係について発達の差異を明らかにしようとした。その結果、中学・大学生期においては、自己を評価する基準として他者からの評価を主に用いるのに対して、高校生期においては、他者との関係よりも自己自身に関心が向き、青年自身の特性に基づいて自己を評価する傾向が強いものと結論された。また、伊藤美奈子(教心, 発達310)は、自己受容に関する先行研究の反省のもとに、社会的規範から見た自己受容と個人内基準から見た自己受容の関わりについて性差に注目しながら発達の検討し、男子は自己の諸側面が相互に関連、融合して全体的に自己を生み出すという融合化のプロセスをたどるのに対して、女子は自己の1つ1つが独立して全体的自己の部分を構成するようになることを見出し、性差が認められることを指摘している。

自己意識ないし自我意識に関する研究のなかで、渡部雅之・山本里花(教心研, 37巻3号)はLoevinger(1970)に基づいて、文章完成法による自我発達段階測定尺度の日本人男性・女性版を開発することを試みている。その結果によると、男女とも、年齢の推移に伴ってより上位の段階の占める割合が増加していく傾向があることを明らかにしている。

平石賢二(教心研, 38巻3号)は、健康—不健康、對他者—對自己という2つの両極性を軸として、①青年期心性と、②心理学的健康性という2つの観点から自己意識の特徴とその全体的な構造を明らかにするために、青年期臨床事例研究の心理治療過程の分析資料や高校生、大学生に実施した4つの下位尺度結果を検討している。その結果、青年期における健康性に関する自己意識の構造として第一主成分構造と第二主成分構造(自己確立感および自己拡散感)を見出した。「自己確立感」主成分は、「健康な自己の確立」を示すものであり、「自己実現的態度」「自己受容・自己信頼感」「自己表明・対人的積極性」「異性・友人関係」および「他者受容」から構成されている。また、「自己拡散感」の主成分は、「衝動性・非現実感」「否定的対家族感情」「視線恐怖傾向・対人緊張」「内閉性・人間不信」「不決断・自己不信感」「目標喪失感・空虚感」の第一次主成分から構成されていることを明らかにしている。Eriksonは青年期の発達課題を「自

我同一性対自我同一性の拡散」という概念で説明したが、理論的前提の相違があるにもかかわらず、本研究において探索的に得られた「自己確立感対自己拡散感」と近いものであるとしている。平石の研究は、青年期臨床事例研究の心理治療過程の分析などの地道な予備研究を重ねている点で、貴重な研究であると言えよう。

青年期から中年期(成人期)および老年期における「自己」あるいは「自我」の発達などに焦点を当てたものはいくつか見られた。その中で、山本里花(教心研, 37巻4号)は、青年期から成人期までの男女を対象に、connectedな側面、separatedな側面として表わされる「自己」の二面性を意識の面から測定する尺度をそれぞれ構成し、あわせて青年期から成人中—後期にかけてのその発達傾向と男女差を実証的に検討するとともに、「自己」のconnectedな面、separatedな面の意識された強さが、自己評価の態度とどのような関連を持つのか、性差・発達差はみられるか、についての検討を試みた。その結果は全体としては、人格発達を成人期以降も続く一生を通じた過程として捉えるEriksonの見解をほぼ指示するものであったが、connectedな「自己」、separatedな「自己」を彼の述べた「自我同一性の確立から親密性、生殖性を経て統合へ」という発達課題と関連づけて考えるなら、少なくとも男女間で、その発達の様相にはやや相違が見られることも示唆された。

20答法ないしWAI(Who Am I?)技法を用いて青年期の自己概念ないし自己イメージを明らかにしようとした研究が2つ見られた。山田ゆかり(心研, 60巻4号)は、小学生、中学生、高校生および大学生を対象として20答法を実施した結果、「自己のあり方の内容面」については、小学生から大学生にかけて、自己の外面的な特徴について記述する傾向が次第に弱まり、自己の内面的な特徴について記述する傾向が強まることが認められた。一方、「自己のあり方の構造面」については、小学生から大学生にかけて、環境内事物・事象や他者とのかかわりについて記述する傾向が弱まり、自己の特性とのかかわりについて記述する傾向が強まっていくことが認められた。また、小学生から高校生では、自己の特性および環境内事物・事象や他者との非中性的なかかわりについて記述する傾向が強まるのに対して、大学生ではそれらとの中性的なかかわりについて記述する傾向も強まり、両傾向が拮抗するようになることが認められた。岩熊史朗・槇田 仁(心研, 60巻4号)も、20答法(WAI技法)を大学生(男女)に実施し、個人のセルフ・イメージの構造の分析を試みた。全被験者のセルフ・イメージの構造としては、一般的評価の次元、身体性の次元、内面世界—外的事象の次元および友人関係の次元の4つの次元

が得られたが、全被験者に共通するセルフ・イメージ構造の特徴は発見できなかった。

自我（自己）同一性に関しては、従来から数多くの研究がなされてきたが、本年度も次のような研究が報告されている。加藤 厚（心研，60巻3号）は、Eriksonの指摘した同一性対同一性混乱の次元における発達を大学生を対象として、入学から卒業にわたる期間について約半年ごとに繰り返し測定することにより縦断的に検討し、その過程およびそれに関連する要因のより詳細な検討を試みた。その結果、(a)1－2年次には同一性体験の全体的分布に顕著な変動は認められない。(b)3年次から4年次前期にかけて、同一性体験を優位に持つ者の増加が認められる。(c)卒業間際には同一性体験を優位に持つ者がさらに増加する一方、同一性混乱体験を優位に持つ者も一定数を占め、双峰的な分布を呈するようになる。(d)女子では同性および異性の友人と勉強に関する危機、男子では異性の友人と生き方や価値に関する危機が同一性混乱体験と優位に関連していることを指摘している。千原雅代（教心，人格536）は、青年期後期から成人期の自我同一性の性差について検討し、男性の方が距離をとる傾向を持ち、男性の同一性はより他者と距離をとるあり方と結びついているのに対して、女性同一性は男性ほど他者との分離と結びつかず、親密性の軸も曖昧であったことから、青年期以降の女性の同一性は男性とは異なる視点からの研究が必要であることを指摘している。堀内和美（教心，発達313）は、中年期女性の自我同一性の形成や発達を職種に焦点を当てて検討した結果、有職群では職業経験を通した同一性の安定化が目立つのに対して、専業主婦群では同一性の動揺が目立ったことを指摘している。太田亜紀（教心，発達314）も、女性の成人期における自我同一性の発達について検討しているが、部分的には職業の有無に関わらず、子育てを経験することで自我同一性が発達することを示唆する結果が得られたとしている。堀内と太田の研究の目的は類似しているが、両者の結果の相違点について今後の検討が必要とされる。その他、青年期から中年期も女性の性度に関するものとして、初塚真喜子（教心，人格554）の報告がある。

大野 久（教心，人格524）は、大学生を対象として青年期の充実感と学生生活との関係について調査した結果、全体的傾向として充実感気分（充実感尺度）と相関の高かった項目は、「今の学校に満足している」（大学生活）、「夢や希望に向かって現在努力している」（将来）、「履歴書の趣味の欄に自信をもって書けるものがある」（趣味）などであり、領域別では、将来、趣味に関する項目で相関が高い項目が多かった。

その他、都筑 学（教心，発達338）は、青年の安心、

不安についての意識と時間的展望の関係を明らかにするために、大学生を対象として質問紙調査を実施した結果、青年が今の生活だけでなく将来の生活においても身近な人間関係（友だちがいるなど）に安心の基礎を求めようとしており、社会的問題（環境汚染や核兵器など）に不安を抱いていることを明らかにするとともに、それらの不安に対していかにして自分たちの時間的展望を切り開いていくのか、そのメカニズムを研究することが次の課題となると指摘している。

5) 経済的・職業的能力の発達を中心とした研究

この分野の研究としては、進路選択や職業意識などの研究が期待される。今年度は、教育心理学会総会において5編が報告されているが、1編を除く他の4編は人格および社会に分類されており、いずれも女子高校生、看護専門学校学生および女子短大生を対象としたものであった。なお、教育心理学研究において報告された研究は認められなかった。

古澤照幸・山下利之（教心，人格558）は、女子高校生の大学・短大への志望動機および専門学校、就職についての志望動機について質問紙調査を実施し、大学・短大進路希望、専門学校の進路希望および就職進路動機についてそれぞれ因子分析を行い、5因子ないし6因子を抽出している。若松養亮（教心，社会610）は、高校生・短大生が、適性に関わる技能や特性をどの程度先天的なものないし固定的なものと考えているかを調査し、技能的な基準に比べて、人格的な基準がより先天的と評定される傾向にあることを指摘している。浅野敬子（教心，発達368）は、女子青年（看護専門学校学生）によって記述された生活史により、看護婦志望成立時期および看護婦志望成立時期と学業観・職業観について検討している。小学校以前から看護婦志望をもっていた事例では、①学業それ自体への関心がそのまま進路選択に結びついた事例はないこと、②以前から養護的な動機を強調している傾向があり、後から看護婦志望をもった事例では自立や資格取得の利点を強調するものが多いのと対照的であったとしている。国眼真理子・松下美知子・西村智子・藤原喜悦（教心，人格556，557）は、女性のライフスタイルに関する一連の研究の第3報と第4報において、4年制の大学生女子と医療系専門学校在学生在を対象にして、やがてライフサイクル第II・III期を迎える女子学生が、自らの人生の中に職業をどう位置づけているか、その結果どのように将来を選択するのかについて自己意識と関連づけて検討している。上記の5編の報告は、現在の段階では比較的小数の限られた対象に関してなされているが、対象の範囲を拡大するとともに、仮説を設定した研究も期待したい。

6) その他

以上、5つの基礎的な発達領域の研究について概観してきたが、ここでとりあげるのは、それらの基礎的な発達領域のいくつかを含んだものや、それらを総合した研究であり、発達課題に関するもの、大学生の生活意識に関するもの、宗教意識に関するものおよび性役割に関するものなどがあげられる。

青年期の発達課題に関するものが2編あったが、菊池則行(教心, 発達311)は、近年の青年に関して指摘されている「成長拒否」的傾向を把握するために、精神的成熟、自己決定、親からの心理的・経済的自立、対人関係能力、政治的・社会的役割、職業準備、性役割を内容とする22項目からなる質問紙調査を、大学生を対象にして実施した。その結果、一般的に指摘されている「成長拒否」的傾向は認められなかったことなどを明らかにしているが、一般的に指摘されている傾向と調査結果との矛盾の原因については指摘されていない。また、辻井正次(教心, 発達312)は、発達課題への取り組みの程度と自我同一性感覚との関連について大学生(1年生と3年生)を対象にして検討している。その結果、青年期発達課題尺度(DTS)においては学年差が認められ、1年生よりも3年生の方が青年期の発達課題(特に、親からの自立と将来展望)について自分にとって重要なものだという認識を持つようになっていたが、自我同一性尺度(EIS)については学年差は認められなかったことなどを指摘している。両研究とも文系の比較的少数の大学生を対象としたものであるが、標本についても考慮した今後の研究を期待したい。

大学生の大学生活に関する意識に関して調査したものが5編あった。4編は同一研究者による共同研究であった。石川雅健・池田博和・平石賢二・佐藤明美・中村和彦(教心, 人格519, 520, 521, 522)は、大学生の現代的心性に関して、大学生からみた大学生の心性、大学教職員からみた大学生の心性、および1960年代のデータとの比較などの観点から検討している。大学生からみた最近の大学生は、経済的には豊かであるが表面的なものに流され、対人関係も表面的でしかない人物像が記述されている。大学教職員からみた大学生の心性としては、「非常に周囲に順応的で、洗練された social skill を持っているが、内面は防衛的で、共通の感覚を持ちにくい」ことが指摘されている。また、30年前の1960年代の大学生との精神的健康度の比較では、現在の方が全体的に精神的健康度が高まっているが、受動的な現代青年像が認められることを指摘している。この研究は、青年心理学、臨床心理学、教育社会学等の総合的視点から自由記述を用いた質的分析や精神的健康度調査の比較などを行った興

味深い研究であるが、サンプル数を増やすとともに、時代的影響による心性と時代的影響を越えた心性との関係などについても明らかにした今後の研究を期待したい。その他、大学生活に対する青年の意識と行動をとりあげたものとして曾我祥子・吉田恒子(教心, 人格523)があり、同一学生の大学1年次と2年次における大学生活に対する期待と満足の推移および関心の対象の変化について検討している。

性役割に関する研究が6編みられたが、そのうちの5編は大学生のみを対象としたものであり、人格や社会部門で報告されたものであった。山岸明子(教心, 発達364)は、大学生を対象として性と関連した2つの道徳的志向(公正さおよび配慮・責任)と性役割における「作動性」(男性性)、「共同性」(女性性)との関係などについて検討した結果、男性性は女性性との相関が高く、公正性は女性性との相関が高いことを指摘しているが、その結果が何を意味しているのかについての考察を加えてほしかった。井上知子・三川俊樹・芳田茂樹(教心, 人格538, 539, 540)は、青年期の性役割形成とその関連要因に関する一連の研究結果を報告している。井上らは、Bem, S.L. (1974) が両性性の概念を取り入れて作成したBSRIなどの既成の性役割の測定尺度においては文化の差によって規定される側面が多いことから、新スケールの作成を試み、男性性尺度においては「男性統合性」と「男性典型性」因子を、女性性尺度においては「女性統合性」と「女性典型性」因子を含む尺度を作成している。その結果を踏まえて、青年期における人格形成を、特に性役割形成を青年期後期にあたる男女大学生を対象にして検討した結果、大学数年間では、はっきりした発達の变化は認められなかったとしている。末田啓二(教心, 社会637)は、青年期(中学生、高校生、大学生)における性役割特性(作動性、美、繊細、共同性)に対する社会的望ましさについて検討した結果、①年齢、性により各因子特有の変動が認められること、②男子中学生は一貫して肯定項目、否定項目間の評定差が小さいこと、および③肯定、否定項目間の評価はほぼ対応していることを指摘している。また、園田直子・青木多寿子(教心, 社会638)は、大学生におけるジェンダー・シエマの性差について、一連の研究成果を踏まえた上で、領域特性からみた性差について検討している。

宗教意識に関する研究が3編みられた。石黒鈺二・酒井亮爾・宮本真理(教心, 発達336)は、大学生の宗教意識が大学生自身の認知している家の宗教とどのような関係にあるかを質問紙調査によって明らかにしようとした。その結果、新宗教群の宗教意識が高く、宗教実践も多いのは、家の活発な社会的宗教的活動に触発されたためと

推測している。丸山久美子(教心, 社会601)は, 現代の青年の社会問題に対する不安意識の強さと宗教的行動・態度一般との関係を同世代の異なる社会集団(専攻別)に属する青年(大学生および看護学生など)を集団ごとに調査し, 比較考察している。また, 山縣喜代(教心, 人格544)は, 60歳以上の男女を対象にして, 高齢の日本人の宗教的意識と心情について調査している。しかし, これらの研究は, 青年や高齢者を対象にしているが, 発達の側面からの検討はなされていない。

内田圭子(教心研, 38巻2号)は, 青年の生活感情に関する従来の研究が感傷性・疎外感・孤独感・充実感といった一生活感情を扱ったものが中心となっていることに対する反省の上に立ち, より包括的な視点から生活感情の全体的な構造の解明や生活空間との関わりについても究明すべきであるとしている。内田が新たに作成した「生活感情尺度」を大学生, 専門学校生, 予備校生に実施した結果によると, 生活感情を構成する4領域(対人関係, 自己認知, 現実目標, 理想目標)においては, 性差や生活空間の影響の程度はそれぞれの領域によって相違することを明らかにしている。

その他, 李 敏子(心研, 61巻2号)の青年の「生, 死, 言葉, 身体イメージ」に関する研究および石井房枝・稲垣陽子・大村恵子・小田久洋・神田直子・吉野 要・桜谷真理子(教心, 発達334)の東海地方に九州から流入してきた若年労働者の青年期についての一連の研究が報告されている。

3. 発達危機の問題・適応・社会病理

この領域において期待される問題としては, 適応, 非行, 登校拒否, いじめ, うつ病, 自殺的行動, ストレスおよび老年性痴呆などの研究がある。これらの問題は, 臨床部門, 人格部門, および社会部門などと深い関係があるが, ここでは, 発達研究的な視点を含むものだけに限定した。本年度の該当論文では, 日本教育心理学会総会発表論文集に8編あったが, そのうち6編は人格部門で報告されたものであった。

宮下一博(教心, 発達309)は, 児童期から青年期の時期における適応の変化が周囲の環境のどのような要因の変化によって生じるのかについて検討している。児童期と青年期における適応の4類型のうち, 適応の変化の認められた児童期不適応-青年期適応群(B群)と児童期適応-青年期不適応群(C群)について比較した結果, 反社会性ではB群の方が学習意欲が高く, C群では低くなっていることのほか, 母親の指示的態度および教師親和においても有意な傾向が認められた。また, 非社会性ではB群の方が母親の過保護的態度も弱まり, 自閉的な遊びも少なくなっているのに対して, C群では母親の過

保護的態度が強まり, 自閉的な遊びもかなり行うようになることなどが明らかにされた。しかし, 適応の変化と環境要因の変化の因果関係については, さらに検討する必要があるであろう。

吉田勝也・丸山総一郎・森本兼曩(教心, 社会602)は, 思春期の子どもたちの生きがいの実態を把握するために, 生きがい尺度とSDS(自己評価抑うつ尺度)などを都内の有名私立中学(中高一貫)の1年から3年の男女に実施した結果, (1)生きがい尺度低得点群は, 高得点群に比べて, 抑うつ度が高く, ストレスや悩みも多いこと, (2)SDS得点が40点以上(抑うつ傾向あり)の生徒が71.1%(男66.0%, 女75.9%)を占めていること, (3)生きがい尺度とSDSの間には密接な関係があり, 自己実現がうまくいっていなかったり, 人間関係が良くないと, 抑うつ傾向が促進されることなどを明らかにした。しかし, 対象の範囲を拡大する必要があるであろう。

那須光章(教心, 人格553)は, 中学生および高校生の不適応現象の背景となっている要因を明らかにするために, 学校観・学習観・教師観・校則に対する意識, 塾通いなどに関する36項目からなる調査を公立中学校および県立高校の生徒(2,195人)を対象にして実施した。その結果, ①学校を楽しいとする度合は中学と高校でほとんど差がみられないが, 高校生の方が授業からの疎遠感が強いこと, ②学校が楽しくない理由は, 「勉強・学習」「厳しい校則」「教師の不適切な指導」が共通してあげられており, 高校生では進路選択をあげるものが次に多いこと, ③学校を休みたいと思う生徒は高校で多くなっていること, ④学校を楽しくないと思う者は, 「いつも休みたいと思う」および「校則がきびし過ぎる」と応答している率が有意に高いことなどを明らかにしている。

土肥康子・田村三保子・北村洋子(教心, 人格503)は, 子どもの問題行動と家族内の人間関係との関連を明らかにするために, 登校拒否, 非行, 家庭内暴力などを主訴として教育相談機関に来談した437事例中, 家族の問題が原因と考えられる244事例(主として小学生から高校生)について分析した。その結果, ①子どもの問題行動と母子関係の歪みとは深いつながりがあるが, 母子関係の歪みは単独に生じるのではなく, 家族内の他の人間関係(両親の夫婦関係と家族成員個々の問題)によって影響を受けていること, ②これらの家族の問題に起因している事例は, 治療的にはかかわりにくく, 家族内力動の変化も得られにくく, 治療・軽快には結びつきにくいことなどを明らかにしており, 中・高校生を含む子どもの不適応行動に及ぼす家族要因の重要性を指摘している。

大学生における適応に焦点を当てたものとして, 佐藤純・佐藤佳子・葉賀 弘(教心, 人格512)の報告があ

る。佐藤らは168名の大学生男女に対して適応状態を測定するためのKDCL（項目数62）とストレス評価票を実施した結果、①大学生の39%が不適応状態にあり、②不適応群はストレス度が高いこと、③不適応群は対人関係に関する項目や自意識に関する項目をストレスの自覚項目として挙げており、多くの精神症状や身体症状を呈していることから、大学生の精神保健上の対策の必要性を強調している。

非行少年の問題をとりあげたものとしては3編の報告があった。そのうち、川畑直人（教心、人格567）は非行少年における自我同一性の問題を主観的障害の側面から実証するために、鑑別所に収容された中学生男子少年（非行中学群）と中学卒業後2年目の男子少年（非行中卒群）および中学3年男子生徒（一般中学群）と高校2年男子生徒（一般中卒群）を対象として、同一性混乱尺度を実施した。その結果、同一性混乱尺度の8つの下位尺度のうち6つの下位尺度において非行群の方が一般群よりも得点が低く、全体的に、非行群は一般群に比べて同一性の混乱をあまり意識しておらず、非行者の生活の実態と食い違う結果となっていることを明らかにしている。鑑別所に収容された非行少年と一般少年との比較を行った調査のなかには、この調査で認められたような予想とは相違する結果が認められることが少なくないが、それらの原因について検討することも今後の課題として期待したい。小島賢一（教心、人格568）は非行少年に見られる「いじめ」についての一連の研究の一環として第6報目の研究成果を報告している。この研究は少年鑑別所に入所した少年の面接・調査資料を元に検討されたものであるが、「いじめられ」体験が非行の発生に深く関与する事例のタイプを、4つの型すなわち、①不良接近型、②過剰補償型、③代償型および④逃避型に分類し、これらのタイプに分れる要因について考察している。いずれにしても、幼少期から児童期にかけての親子関係により大きな影響を受けることが強調されている。また、内山絢子（教心、社会640）は全国17都道府県で福祉犯の被害者として補導された少女275名を対象にして、非行内容別社会的背景と行動特性について調査を実施している。その結果、性非行に関しては「性の商品化」型、「友人の紹介」型、「ナンパ・テレクラ」型などの5類型に大別されるが、家庭への不満（親の無理解、親の離婚、母親との不和など）、学校適応（学業に関する不適応、教師との関係など）に関しては類型に関係なく影響が大であり、性による被害に遭う以前の逸脱行動の体験およびマス・メディアとの接触において「性の商品化」型との関係が認められた。性非行少女の行動に及ぼす社会的背景の重要性が指摘されている。

ライフ・サイクルにおける種々な危機に関する問題や適応上の問題は、生涯教育ないし生涯学習の領域の問題としても、今後重要な課題となるであろう。

おわりに

以上、日本教育心理学会総会発表論文集、教育心理学研究および心理学研究に掲載された研究の中から、青年期以降の発達研究の概要を筆者なりの枠組みに沿って纏めさせていただいたが、その過程の中でいろいろな点で考えさせられることがあった。

第1の点は、研究対象および研究方法・技術に関する問題である。わが国の従来の発達心理学的研究は、河合隼雄（教心、公開シンポジウムI）も指摘しているように、青年心理学で終りであった。研究方法・技術についてみても、質問紙調査法を用いた横断的研究によるところが多かった。この傾向は本年度の大半の研究についても認められたが、生涯発達の観点から中年期および老年期におよぶ広範囲の年齢層を対象とした研究、縦断的な方法による研究、質問紙や尺度を作成するに当たって面接調査法や臨床的・事例研究的資料の分析を踏まえて行った研究なども少数ながら認められたことは、今後の発達心理学の方向に希望をもたらすように思われる。また、本年度の日本教育心理学会総会におけるシンポジウムとして「中年の発達心理学」がもたれたことも注目される。

第2の点は、研究内容領域に関する問題である。筆者は青年期以降の発達研究の領域区分を、諸能力の発達という観点から5つの基礎的領域を設定し、その他発達危機・適応に関するものおよび研究法を設定した。このような視点から見た場合、認知的能力の発達に関しても、単に知能の発達のみならず、種々な事象に対する認知様式や思考様式の年齢因子を含めた変化などの究明を通して、新たな視点からのメスが入られる可能性も開かれるであろう。身体的能力の発達に関しても、身体的能力の成長、成熟から衰退の過程における心理的影響（例えば、身体像の変化）などが重要な課題となるように思われる。また、上記の諸能力が各発達段階においてどのように統合されるか、各年齢段階に生じやすい危機的問題や適応上の問題はどのような能力の未発達、萎縮、衰退ないし障害と関わりがあるのか、などについても、生涯発達の視点から究明されていくことになるであろうと期待される。教育心理学年報において「青年期以降の発達」研究について展望するスペースが与えられていることの意義は大きいと思われる。

本稿を纏めるに当たって、日本心理学会発表論文集をはじめ他の研究誌に掲載された研究や著書などについて

も触れる予定であったが、紙面の都合もあり割愛せざるをえなかったこと、論文の解釈に当たって、筆者の能力不足のために誤解している部分もあるかもしれないこと、および以下に示す引用文献欄に学会発表論文を掲載できなかったことをお詫びしたい。

引用文献

- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 岩熊史朗・横田 仁 1989 個人のセルフ・イメージの構造—大学生を被験者とした WAI 反応の相互関連性の分析— 心理学研究, 60, 237-244.
- 加藤 厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, 60, 184-187.
- 李 敏子 1990 生, 死, 言葉, 身体のイメージ—青年を対象として— 心理学研究, 61, 79-86.
- 岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 柴田利男 1990 青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響 心理学研究, 61, 123-126.
- 高橋裕行 1990 「親密性地位」の検討と同一性地位と親密性地位との連関における性差の検討 教育心理学研究, 38, 240-250.
- 上野徳美 1990 教育場面における説得への抵抗に関する発達的研究 教育心理学研究, 38, 251-259.
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117-125.
- 渡部雅之・山本里花 1989 文章完成法による自我発達検査の作成—Loevinger の WU-SCT の翻案とその簡易化— 教育心理学研究, 37, 286-292.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20答法での自己記述を手がかりとして— 心理学研究, 60, 245-252.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.